

# 病弱児の心のケアに対応する教師のための実践的研究

## ー自立活動に役立つ事例集の開発と試行ー

教育学研究科 教育実践創成専攻 実践開発コース 学校マネジメント分野 小尾 幸代

### 1. 研究の背景

#### (1) 病弱児を取り巻く問題や課題

病弱及び身体虚弱の子ども（以下「病弱児」という。）の障害や疾患は多岐に渡り、また児童生徒によって病態や症状等、実態は様々である。そのため、教師は疾患における生理・病理的な知識及び、その実態に合わせた支援・指導を行うことが求められている。しかし、病弱教育はその特異性から、特別支援学校に勤務する教師であっても、病弱教育に関わったことがない者にはなかなか理解しづらいという現状がある。

病弱児が抱える困難さを挙げると、例えば、病気や生活制限によってストレスフルな状態にあるために、体調の整いにくさがあり、疲れやすい。病気による入院、通院、治療等により学校から離れている期間が長いこと、学習の空白や生活経験の乏しさがある。中には友達関係を築くことへの苦手さがある。無気力等、エネルギーが低い。心の不調から身体症状に表われる子もいる。こうした心の症状は自覚しづらく、周りの人にも分かりにくいことが多いこと、甘えやさぼっている等と誤解されてしまうこともある。そのため病弱児を担当する教師には、こうした病弱児の心身の不調や SOS を受け止め、病態の変化に応じた関わりが求められる。同じ病気であっても個性が高く、一人一人に異なる対応が必要となるため、集団での活動には配慮と工夫が不可欠である。加えて、学校はプラットフォームの役割を果たし、医療、福祉、家庭等と連携・協働した支援体制を作ること重要となる。最近では、病気のある子どもたちへの教育の必要性を医療の側から求められるようになってきたが、それらに対応できる教師が育っていないことも大きな課題の一つで

ある（副島 2022）。

近年は、病弱児に対する教育を行う特別支援学校（以下「特別支援学校（病弱）」という。）や病弱・身体虚弱特別支援学級（以下「病弱学級」という。）に在籍する児童生徒数は増加してきている。全国病弱虚弱教育研究連盟が隔年で調査している病類別調査の結果では、心身症等の行動上の障害が一番多く、発達障害と診断されていた児童生徒が適応障害やうつ病等の診断を受け、年度途中で特別支援学校（病弱）に転入してくることも増えている（文部科学省 2021）。本県でも、平成 19 年の特別支援教育の本格実施に伴い、小中学校の病弱学級数は、平成 20 年度の 10 校から令和 5 年度には 43 校と、約 4 倍に増えた。

このように特別支援教育の変化、法制度の整備、環境面等のハード面は整いつつあるが、病弱教育は他の障害種に比べて見えにくく、周囲に分かりにくいことから、指導のノウハウ等のソフト面については、まだ発展途上と言わざるを得ない。森山（2016）は、児童生徒の教育的ニーズのカテゴリーの検討、指導内容や効果的な指導方法の検討が喫緊の課題であると述べている。ここでいう教育的ニーズとは、子どもの学習上または生活上何らかの教育的な配慮が必要であると考えられることの総称である。

一方、国立特別支援教育総合研究所病弱班（以下「特総研病弱班」という。）（2017）は、森山（2016）の教育的ニーズに焦点をあて、精神疾患及び心身症等の病状から派生すると考えられる教育的ニーズと自立活動との関連性を示した。本研究が自立活動に着目したのは、この「特総研病弱班」の研究から多くの示唆を得たことによる。

## (2) 自立活動の重要性

自立活動とは、障害がある幼児児童生徒が自立を目指して、特別支援教育を行う特別支援学校と、特別支援学級、通級指導教室等で教育課程上重要な位置を占める教育的な活動を行う特別の指導領域のことである。文部科学省

(2021)においては、病弱児に対する特別な指導内容を整理していくことが大切であると述べ、「病気等の状態の理解と生活管理」、「情緒の安定」、「コミュニケーション手段の選択と活用」等を挙げ、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために、自立活動という指導領域が設けられていると示している。

学童期や思春期の病弱児にとっての自己管理能力の育成、セルフケアの目的は、病状の維持・安定を図ること、健康状態を保ち心理的に安定すること、学校生活や社会生活に適応していくことである(小野・西牧・榊原 2018)。

よって、病弱教育における自立活動は重要な意味をもち、個別の学習形態をとることが多い。

しかし、今期の学習指導要領改訂では、主体的・対話的で深い学びのため、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善が求められるようになった。今回の改訂のポイントについて、藤田(2021)は、「育成を目指す3つの柱」、「主体的・対話的・深い学び」は、病弱教育における学習時間の制約等の課題に対して、教科の内容を学習すること以外の負担を強いるものではなく、学びを深め、促進し、さらには、よりよい人生を送るための汎用的な力を付けることにつながるものであると指摘している。病弱教育でも、主体性や自律性、社会性という点においては、学校や社会生活、友達関係の中で育まれていくものであり、集団活動を効果的に取り入れる必要があるとも考えられる。

以上のことから、病弱児の心のケアに対応する教師のための自立活動における調査、事例集の開発とその試行を研究対象とすることにした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は次の2点とする。

(1) 病弱児の心のケアに対応している特別支援学校(病弱)及び病弱学級の教師が直面している指導上の課題を調査によって明らかにする。

(2) 特に指導上の課題としてあげられる自立活動について、教師から効果的な指導法等、アイデアを広く収集するとともに、市販教材等の紹介も加えた事例集を作成し、使い方について試行(研究授業)を通じて、その活用可能性を探る。

本研究における「心のケア」とは、心身症等、心のバランスを崩した子どもの(病気・症状を含む)正しい知識や理解をして、必要な配慮、教育等をするを指している。

また「心身症」は、日本心身医学会教育研修委員会(1991)『心身医学の新しい診療指針』541頁を参考に、次の3点と定義する。

- ・体に症状が現れる身体疾患である。
- ・症状の発症や悪化にストレス等の心理的要因が関係している。
- ・精神疾患に伴う身体症状とは異なる。

## 3. 先行研究

本研究の先行研究としては、国立特殊教育総合研究所病弱教育研究部(2004)、森山(2016)、特総研病弱班(2017)等があるが、中でも、病弱児に対する教育の充実を積極的に研究することで、今後の病弱教育の指針となるものとしてまとめられた特総研病弱班(2017)を中心的に参考にした。

特総研病弱班(2017)では、

- ① 実態把握のための、全国的な調査や統計を行い、精神疾患及び心身症のある児童生徒の教育的ニーズに関する調査を行い、その特徴や課題を分析した。
- ② 教育的支援・配慮に関する事例やモデルを収集し、その効果や課題を検証した。
- ③ 連続性のある多相的多階層支援(Co-MaMe)という枠組みを提案し、その実践方法や評価指標を示した。
- ④ リーフレットやガイドブックなどの資料を作成し、公開した。

等が成果として挙げられる。

一方で、研究の考察には、具体的な教育的ニーズの把握と支援・配慮から個別的教育支援計画や指導計画にいかせるようなツールの開発が望まれること、「心身症」の実践的な事例集の数が少ないため、似た病状であっても様々な教育的ニーズに対する支援・配慮例をより多く集約すること、経験が少ない教師でも考え方やプロセスをサポートできるような内容が求められること等の課題を挙げていた。つまり、この研究は児童生徒の教育的ニーズの調査でとどまっており、教師の課題は明らかにされていないということになる。

そこで、本研究では指導上の課題である自立活動について、教師からの情報を広く収集して、事例集を作成する。さらに事例集の試行を通じて、その活用可能性を探ることで特総研病弱班（2017）の研究を継承、発展させたいと考えた。

本研究の、病弱教育「心身症」における自立活動の事例集を開発することの意義を列举すると、心のケアを必要としている児童生徒に関わる教師の一定の専門性の向上につながることで、授業作りの参考となり、教師の時間的余裕や不安軽減ができること、児童生徒の特性や状態に合わせた特別支援学校での教育活動や支援を、移行先、進学先等に引き継がれる際に汎用でき、教師が行う支援の質の担保が期待できること等が挙げられる。

#### 4. 研究の方法と内容

##### (1) 自立活動における教師の指導上の課題と実践事例の「調査」と「分析」

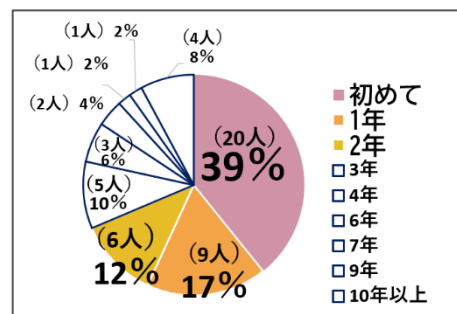
自立活動における教師の指導上の課題と実践事例の「調査」について、本県内の特別支援学校（病弱）（3校）、病弱学級（小学校30校、中学校13校、計43校）に勤務する教師87名を対象とした質問紙調査を実施した。調査期間は、令和5年6月から7月とし、調査は、Googleフォームを使って行った。質問内容は、A.基本情報について、B.自立活動の計画と実施について、C.教師の困っていることを精神的症状、身体的症状、行動に表われる症状に分けて聞き、

D.効果的な指導方法の情報提供を依頼した。

質問紙調査の質問項目については、特総研病弱班（2017）と森山（2016）を比較した。特総研病弱班（2017）は項目数が多い上に、同じ症状でも複数の項目にまたがっている。原因や課題を明確にし、見立てやアプローチをより適切にするためには、森山（2016）の26項目が適していると考え、その26項目を使用した。

##### A. 基本情報について

病弱教育に関わる県内の教師87人のうち、51人の回答があり、回答率は58.6%であった。



【図1】病弱教育の経験年数（n=51）

まず、基本情報から注目したのは、年齢層である。50代、60代の教職年数が長いベテラン教師が多いが、病弱教育の経験は浅い教師が多いという傾向が分かった。次に、病弱教育の経験年数【図1】について、初めてが39%、1年未満が17%、1年から2年未満が12%で、2年に満たない教師は合計で68%だった。

さらに、免許取得率については、小中学校の59%は、特別支援学校の免許をもっておらず、調査には、手探りで教育活動を日々行っている様子も記されていた。

##### B. 自立活動の計画・実施について

自立活動の計画・実施については、平成19年以降、特別な配慮を必要とする子に個別的教育支援計画等の作成が推進されたこともあり、支援計画作成の困難さは減ってきているという結果だった。

一方、「病状や症状等の理解に苦戦している」と答えたのは53%あり、病弱ならではの悩み

に多くの回答があった。また、「指導・支援面での対応に困難を感じている」は65%あり、中でも「病状、症状に応じた指導・支援」は個別性が高く、専門的な対応を迫られるという内容が多いことから、指導・支援面での対応に困っている教師が多くいることが分かった。具体的に対応に困る課題として多かった項目は、学習空白への対応52%、学習が定着しにくい33%、無気力33%、不安が高い33%である。

### C. 自立活動の計画・実施の際に困っている児童生徒の症状について

自立活動の計画・実施の際に困っている児童生徒の症状についての調査では、一人当たりの平均チェック数は、精神的症状2.1、身体的症状1.7、行動に表れる症状3.2となり、行動面に症状として表れることに困難さを抱き、複数チェックしている人が多い傾向が見られた。

精神的症状、身体的症状、行動に表れる症状の各症状の上位3項目を見るといずれも20人を超え、回答が集中していることが分かった。

教師の授業アイデアは、全54の紹介があった（発表者自身の事例11含む、市販書籍の紹介5の回答あり、全54事例の紹介のうち、事例集に掲載の同意があったのは33事例である）。

困難さを抱える病弱児の精神的症状【図2】には、不安23人、情緒不安定・感情の起伏23人、他者理解が難しい児童生徒への対応20人と回答が多かった。



【図2】困難さを抱える病弱児の精神的症状

身体的症状では、だるい・疲れやすい32人、その児童生徒固有の疾患症状等への対応23人、心理的要因からくる消化器系の症状12人、頭痛12人という結果となり、心身症として定義した「体に症状が現れる身体疾患」、「症状の発症や悪化にストレス等の心理的要因が関係している」ものの回答が多かった。

行動に表われる症状としては、関係性28人、集団参加26人、対人スキル22人と対人関係やコミュニケーションに関するものが多く、自己理解23人、生活習慣の未獲得15人や体調管理13人といった健康面、過剰適応10人や衝動的な行動への対応10人といった日々の生活面に関する課題にも回答が多いことが分かった。

| 【対人関係 他】 |                                                                                              |                          |     |       | 著書等                                                                                                                                                                                               |                                                     |
|----------|----------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------|-----|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------|
| 1        | 遊びに誘う作戦を考えよう                                                                                 | 対人関係・コミュニケーション           | 小学生 | 個別    | 紙に自分の言いたいことや誘いたい人の名前を書いて思い切った声をかける。困ったときに呼べる人や先生なども書いておいて頼れるようにする。                                                                                                                                |                                                     |
| 2        | バランスボールを使ってミッションクリア!                                                                         | 対人関係、身体の動き               | 小学生 | 個別    | ・年間を通して活動する。・バランスボールを使って体幹を鍛える。・教員との関わりの中で相手に合わせて動いたり、適切な言葉のキャッチボールを学んだりす。・ミッションをクリアするとシールがもらえる。                                                                                                  |                                                     |
| 3        | 食堂オープン                                                                                       | 対人関係・コミュニケーション           | 中学生 | 個別    | 自己表出があまりない生徒。宿泊学習に参加できないため、校内に残り先生方に対して食堂をオープンする生徒が決めることを大事にして、注文アンケートチラシの作成、メニューの考案、食事作りを行った。みんなに喜ばれ、感想をもらい嬉しそうだった。                                                                              |                                                     |
| 4        | 自分を知ろう<br>「違いを知って自分を振り返ろう」<br>「自分の強みと弱みを知って、人間関係について考えよ」<br>「タルトタタンを作ろう」<br>「コントロールについて考えよう」 | 対人関係・コミュニケーション、自己理解、他者理解 | 中学生 | 集団    | 学級や学年の異なる小集団で実施可能。関係性ができ落ち着いた時期（1学期後半から2学期）や、進学・移行が視野に入ってくる時期に3～4時間の設定で行うと良い。ネガティブな感情をもちやすく、コントロールに課題のある子、自己を振り返りながら集団や人との関係性を意識してほしい子への活動に適している。エゴグラムチェックやリフレーミング等を用いて、自分の強みを認識できるようにする活動となっている。 | 自己理解力をアップ! 自分のよさを引き出す33のワーク（高山恵子著、合同出版株式会社）1,800円＋税 |
| 5        | スキルアップ講座                                                                                     | 対人関係・コミュニケーション           | 中学生 | 個別/集団 | 「何と言ったらよかったの?」友だちとトラブルになったことがある場面に似ている場面を設定し、どのような言葉を使い、どう行動するのが良いのか考える                                                                                                                           |                                                     |

【図3】自立活動に役立つ事例集（一部抜粋）

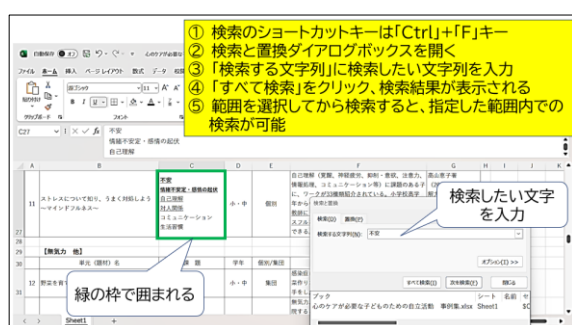
## (2) 自立活動に役立つ「事例集の作成」と「試行」

まず、自立活動に役立つ「事例集の作成」では、D.効果的な指導法で寄せられた事例や市販書籍等の情報を整理し、自立活動に役立つ事例集【図3】を作成した。

事例集は、エクセル形式で中心的課題ごとにカテゴライズし、単元名で50音順、集団の形態や活動内容の項目ごとに整理し、表にまとめた。その際、病弱教育に長く携わっている教師から回答のあった児童生徒との基盤となる関係作りや、自立活動の捉え方、連携について等「病弱教育に関わる上で、大事にしていること」を表の先頭部分に載せた。

事例集のエクセル表については、中心的課題の欄に複数の症状を記載した。これは自立活動が、児童生徒の実態に応じて、必要な項目を選定し、相互に関連付けて取り扱うものであり、1つの単元に複数のねらいがあること、同じ単元でも、児童生徒の実態によっては中心的課題が異なることがあるからである。

自由記述欄にあった市販書籍の紹介には、筆者自身がこれまでに活用、参考にしてきた書籍も含め、分類した。またキーワード検索や加筆修正もできるものとした。



【図4】事例集の検索方法

エクセルでの検索は【図4】の通りを行う。

- ① 検索のショートカットキー「Ctrl」+「F」キーを押す。
- ② 検索と置換ダイアログボックスを開く。
- ③ 「検索する文字列」に検索したい文字を入力する。
- ④ 「すべて検索」をクリックすると検索結果

が表示される。

- ⑤ 範囲を選択してから検索すると、指定した範囲内での検索が可能となる。

というように、①から⑤の手順で検索したい文字を入力することにより、検索結果にヒットした部分が緑枠で表示されるようになっている。

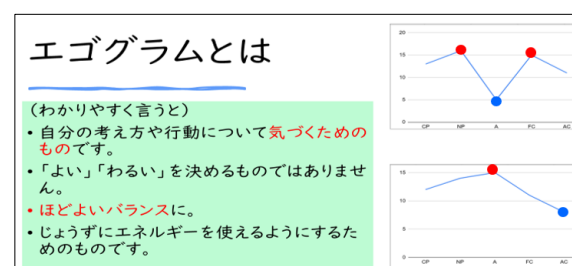
次に、自立活動に役立つ「事例集の試行」として、教師の指導上の課題と実践事例の調査・分析から「課題がある」と多くの回答があった上位4項目に関する試行（研究授業全5回）を実施し、その活用可能性を検証した。

## 研究授業1「自分を知ろう」

全3次の計画を立てた。これまで、実習校では集団での自立活動の実績はなかったが、集団で行うからこそ得られる自己肯定感、社会的自立、よりよい対人関係を築くことをねらい、自己理解を深めること、お互いの良い面に目を向け、他者理解がすすむことを意識した活動を、中学部の小集団で行った。実践を、以下に示す。

### 第1次

エゴグラムチェックは性格分析には優れており、グラフの山と谷、自分の「強み」と「弱み」について理解を深めることができる教材である。

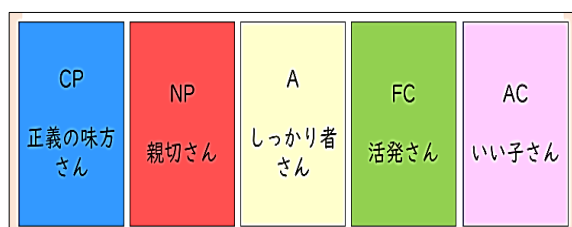


【図5】強みに注目させるワークシート

今回の授業では、自分に自信のない生徒たちが多い病弱児の特性を踏まえ、「弱み」をどう改善していくかではなく、グラフの山の部分のみを取り上げることとした。「強み」に着目させること【図5】で、自信がもてるようになった生徒たちの様子を見ることができた。

## 第2次

エゴグラムの読み取りを話し合う活動では、家庭に様々な背景を抱える病弱児のリスクを避けるために、本来はCP（Critical Parent）を「厳しく批判的な親」と訳される行動パターン名であるが、「正義の味方さん」という、家族や家庭を想起させない和訳ネーミングに変えて提示した【図6】。変更したネーミングは子どもたちに受け入れやすい言葉になり、生徒同士の関係にも良い影響を与えることができた。



【図6】5つの行動パターン和訳ネーミング

## 第3次

2時間計画で実施した。前半「失敗から生まれた奇跡の菓子：タルトタタン」を作った。タルトタタンには、パイやタルトの失敗作が転じて、新しいおいしい菓子になったという謂れがある。発想を変えることで、新しい良さが生み出されたとされる菓子ならば、リフレーミングの事例として教材化できるのではないかと考えた。授業の後半では、みんなで調理した菓子を食べながら、「自分の弱みや失敗と思っていたことを、別の角度からフレームを変えて見直してみるリフレーミング」を学ぶ活動を行った。

誰にでも「強み」と「弱み」がある。生徒は「弱み」に注目しがちであるが、どちらも全て自分自身であり、切り離せないものと理解することができた。生徒からは、「タルトタタンの発想で、自分の短所も長所になると思った」、「友達の苦手な一面も、見方を変えてみる」等の感想があった。自立活動は、個々の課題改善のために個別で行うことが多いが、集団活動により、互いのよさを認め合える機会にもなった。

今回、調理活動と知識を学び、対処法を考える活動を2時間続きの計画にしたことにはもう一つの目的があった。楽しい、おいしいとい

う体験と記憶から、対処法を導き出すという「将来の生活に汎化できる一生ものの体験と知識とが結び付く教材」であるかの検証である。

生徒たちは、友達と共に楽しく調理した体験とおいしく味わった味覚「タルトタタン」を記憶と結び付け、失敗したときや「弱み」に傾きそうなとき、自分でコントロールし「強み」を出す、見方・考え方を変換する「リフレーミング」を思い出すことが期待できると考える。その点においても十分評価できる事例となった。

## 研究授業2「ストレスについて知り、うまく対処しよう」

ストレス対処、マインドフルネスを扱った実践である。「日常的に活用できるセルフコントロールの方法を身に付けること」をねらい、ゆっくり息を吐くことの大切さを体感できた。生徒からは、就寝前等に、自立的に生活で活用している様子も聞かれ、効果があると分かった。

## 研究授業3「自分の知っている自分とみんなの知っている自分」

中学道徳の教科書（光村図書）に載っている『言葉の向こうに』という教材と、自分の特性や自分に対する理解を4つの領域に分類し、それぞれを「窓」に例えて考察する『ジョハリの窓』という教材を使用した実践である。

道徳の授業においては、友達同士で行う教材であるが、集団内の心理的安全性を考慮し、対人関係が上手ではない生徒への配慮として、今回は教師との共同活動にして行うこととした。教師から十分認められる経験ができるよさがあり、自分と担任（キーパーソン）とのズレに着目することで、相手から見えている自分を受け入れること、相手が知らない自分の発信方法を考えることができる事例であると分かった。

## (3)「事例集」の協力校への配布と意見交換

令和5年12月下旬に調査協力校を訪問し、事例集のCD-ROMを配布、研究成果報告と活用に向けた説明をし、意見をもらうことができた。意見交換では、「病気の理解」「だるさや疲

れやすさによる困難さへの対応」「無気力への対応や学習に向かう土台を作ることが優先」等、病弱教育ならではの課題があることが分かったという意見があった。この結果は、森山（2016）、谷口（2014）同様、病弱児が抱える具体的な心理社会的問題として、学習の遅れによる焦りや劣等感、根深い不安や葛藤があること、病弱児が心に問題を抱えたときに、それが身体症状や普段と違う行動となって表れやすいということが言える。

さらに、「復学するまでに学習空白の補完が必要」、「自立活動と教科指導とのバランスが大事」、「心のケアをしながら学習をすることが必要」等、人生をよりよいものにするために、まず心のエネルギーをためることが、学習に向かう気持ち作りや、社会的自立のために必要な力であると明らかになった。

## 5. 成果

### (1) 教師が直面している自立活動における指導上の課題を調査により明らかにすること

質問紙調査の結果からは、本県の特別支援学校（病弱）及び病弱学級の教師 68%が、病弱教育の支援・指導経験が2年未満であり、自立活動の計画・実施について課題や困難さを抱えていることが分かった。一方、その際に困っている児童生徒の症状としては、「不安」、「情緒不安定・感情の起伏」、「自己理解」、「対人関係・他者理解」におおよそ絞られており、それらについての事例、情報提供が教師へのサポートとして有益であるということも推測された。

また今回の調査により、教師は、不安や失敗もある中で、病弱児の心のケアに対応していると分かった。チーム支援の重要性が分かると共に、「辛いのは自分一人ではない」というメッセージを送ることができたことを、一つの成果と考えることもできるだろう。

### (2) 自立活動の効果的な指導法等を収集し、事例集の作成と試行を通じ、その活用可能性を探ること

「事例集」配布時の意見交換により、病弱教

育を初めて担当する教師及び経験の浅い教師にとっての教材の利活用や参考資料となったことや、教師の心理的負担や多忙化の軽減に役立ったとの評価をいただき、事例集の有効性を検証することができた。また事例集をもとに4つに絞られた課題に焦点をあてた研究授業を全5回行うことができた。特に、小集団活動での自立活動を初めて試みた。主体的・対話的で深い学びができ、自己理解や感情のコントロールを学ぶことで、他者理解や関係性を築くことにもつながった。社会や地域での生活にいかすことができる力が身に付く授業提案となったことから成果であったと言える。

今回試行した研究授業は、「受容期」・「試行期」・「安定期」のうち、教師との関係性が築けた「試行期」から移行を見据えた「安定期」に実施すると効果が期待できるものである。この他にも事例集には「移行時」の引き継ぎに活用できる事例も含まれており、参考にさせていただけるのではないかと考える。

## 6. 今後の課題

病弱教育は子どもの状態によって変化するものであり、個別の課題に応じた目標を設定し、取り組む必要がある。筆者は、事例集の試行として、市販書籍を参考にした授業作りや指導案作成を行ったが、既存の教材は病弱児のアセスメントに基づいて配慮、工夫、アレンジが必要不可欠であると分かった。

今後も、この事例集に加筆修正や、内容の充実が加えられ、あるいは研究の進捗によりカテゴリー等の見直しを含めた改善が継続的に行われることを期待したい。

## 7. 引用・参考文献

- 藤田昌資（2021）病弱教育における「主体的・対話的で深い学び」の視点『日本育療学会』第68巻,47-50
- 本多環，松崎博文（2008）『『困り感』に寄り添うきめ細やかな支援』『福島大学総合教育研究センター紀要』,第4号,17-24
- 欠ノ下郁子，植田誠治（2019）「心の健康問題

- を抱える児童生徒への支援に関する実態－養護教諭を対象としたアンケート調査より－  
『日本教育保健学会年報』,第26号,15-28
- 北川貴章・安藤隆男(2019)『「自立活動の指導」のデザインと展開－悩みを成長につなげる実践32－』,ジアース教育新社
- 日下奈緒美(2015)「平成25年度全国病類調査にみる病弱教育の現状と課題」『国立特別支援教育総合研究所研究紀要』第42巻,13-25
- 国立特殊教育総合研究所病弱教育研究部(2004)「病弱養護学校における心身症等の児童生徒の教育－『心身症など行動障害』に括られる児童生徒の実態と教育・心理的対応－」
- 国立特別支援教育総合研究所(2017)「精神疾患及び心身症のある児童生徒の教育的支援・配慮に関する研究」
- 国立特別支援教育総合研究所(2017)『病気の子どもへの教育支援ガイド』,ジアース教育新社
- 国立特別支援教育総合研究所病弱班(2017)「病気のある子どもへの教育支援ガイド(こころ編)－発達障害の二次障害やメンタルヘルスを含む－(試行版)」
- 横山孝子(2011)『特別支援学校新学習指導要領・授業アシスト3 よさを伸ばし、豊かな生活をつくる自立活動』,明治図書出版
- 森山貴史(2016)「精神疾患や心身症のある児童生徒の教育的ニーズに関する一考察－A特別支援学校(病弱)教員対象の調査を踏まえて－」『国立特別支援教育総合研究紀要』,第43巻,45-57
- 森山貴史(2018)「病弱教育における発達障害を併せ有する心身症等の児童生徒を対象とした実践研究の動向－特別支援学校(病弱)の実践資料の検討から－」『福島大学総合教育研究センター紀要』,第4号,521-531
- 文部科学省(2021)「障害のある子供の教育支援の手引－子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて－」
- 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課(2022)「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」
- 新平鎮博・日下奈緒美・森山貴史(2014)「慢性疾患をもつ児童生徒の特別支援学校(病弱)及び病弱・身体虚弱特別支援学級の在籍に関する疫学的検討」『国立特別支援教育総合研究所ジャーナル』第3号,18-23
- 日本心身医学会教育研修委員会(1991)「心身医学の新しい診療指針」第31巻,第7号,541
- 日本精神神経学会(2014)『DSM-5精神障害の診断・統計マニュアル』,医学書院
- 岡村尚昌(2022)「日本の病弱児を取り巻く現状と課題：主要文献からの考察」『久留米大学教職課程年報』第6号,10-20
- 小野次郎・西牧謙吾・榊原洋一(2018)『特別支援教育に生かす病弱児の生理・病理・心理』,ミネルヴァ書房
- 世界保健機関(2018)『ICD-11疾病及び関連保健問題の国際統計分類第11版日本語版』,(第6章【精神・行動・神経発達の疾患】)
- 副島賢和(2022)「入院中の子どもを支える教師の専門性とは何か 院内学級の教師の教育観を考える」『障害者問題研究』第50巻,第1号,18-25
- 谷口明子(2014)「病弱児の社会的自立のために"つきたい力"とは－キャリア発達支援の観点からの探索的研究－」『東洋大学文学部紀要教育学科編』,第40号,111-120.
- 八島猛・栃真賀透・植木田潤・滝川国芳・西牧謙吾(2013)「病弱・身体虚弱教育における精神疾患等の児童生徒の現状と教育的課題－全国の特別支援学校(病弱)を対象とした調査に基づく検討－」『小児保健研究』,第72巻,第4号,514-524
- 吉原一文・須藤信行(2018)「医学と医療の最前線 身体症状症」,『日内会誌』,第107巻,1558-1565
- 全国病弱虚弱教育研究連盟 心身症等教育研究委員会(2022)「精神疾患等のこころの病気のある児童生徒の指導と支援の事例集VI－『Co-MaMe』を活用した教育支援－」
- 全国特別支援学校病弱教育校長会・国立特別支援教育総合研究所(2009)「病気の子どもへの理解のために－『こころの病』編－」